

包み込む社会とは

北九州市人権啓発映画制作に関する検討会議委員長 中島 俊介
(北九州市立大学 地域創生学群教授)

なぜ包み込む社会が必要なのでしょう。私たちは自分への関心と同じように「他者への関心」を持つことが大事だとされます。自分の行動がより大きな共同体のためになるように積極的に活動しようとするのが包み込む社会の理念です。このような地域に貢献しようとする個人の感覚は「共同体感覚(他者への関心 social interest)」と呼ばれます(アドラー心理学)。この感覚は三つの側面を持ちます。①私は共同体の一員だという「所属感」 ②共同体は私を助けてくれるという「信頼感」 ③私は共同体のために役立っているという「貢献感」の三つです。これらの融合した感覚の育成と発達が包み込む社会では望まれるのです。

映画の中ではこの共同体感覚を失ってしまった人物が描かれます。地域で孤立した一人暮らしの波岡康弘です。そしてその彼のかたくなな心と何とかつながろうとする福祉協力員(別名、見守り隊)の照井邦子の日常的な活動が描かれます。一見「おせっかい」に見られる邦子の行動に東京から転居してきた亜紀は影響を受けます。その結果、亜紀は包み込む地域社会実現への関心を高め、彼女自身の共同体感覚を育てていくことになります。

私の恩師の言葉です。「無関心は心の死である。他者の苦しみを見て見ぬ振りをすることによって、自分の心の大切な何かをマヒさせ、死にいたらしめている」。この映画は、心の死を感じていた人たちの蘇生のドラマです。そして蘇生に必要なのは他者への関心であり、「独りぼっちの死を迎えさせてはならない。孤独や寂しさを感じさせてはならない」という、地域社会を支える私たちの強い意志と行動であることをこの映画は訴えているのです。

あらすじ

生まれも育ちも東京で、内向的な性格の石田亜紀(40)が、夫・誠(45)の故郷、北九州市に引越してきて初めての冬が来た。「世話好きおばさん」として有名な照井邦子(63)が何かと声を掛けてくれるが、その親切も亜紀にとっては「余計なお世話」だ。しかし、愛猫のバナナが家出してしまったため、亜紀は苦手な邦子にも助けを求める。

バナナを拾って面倒を見てくれていたのは、同じ町内に住む一人暮らしの男・波岡康弘(68)だった。しかし、波岡は昼間から酔っぱらっていることが多く、近所の人たちからも警戒され、孤立している人物だった。

それでも、バナナのことで波岡に恩を感じている亜紀は、邦子と一緒にあらためてお礼に行く。邦子は福祉協力員として「ふれあいネットワーク」に積極的に参加しており、地域の見回りや見守りをしていた。だが、波岡はドアを開けてはくれなかった。

そんなある日、二人の目の前で、波岡が倒れた。

波岡は重い病気で、しばらく入院することになった。波岡は、自分を助けた亜紀や邦子に対しても心を閉ざし、悪態をつく。「自分みたいな人間は死んだ方がいいんだ」と。波岡は自分が地域の住民たちから疎まれてることを自覚していた。波岡が自暴自棄な態度をとるのには、もう一つ理由があった。遠い昔、自分の勝手に家族を捨てたことへの負い目があったのだ。娘が二人いるが、いまさら会えるわけがないと…。

亜紀は邦子と共に、親身になって波岡の世話をする。

波岡が退院した日、亜紀と邦子は、お互いの胸のうちを語り合う。邦子は、息子に発達障害があり、死を考えるほど悩んだことがあったと打ち明けた。そんな時、支えてくれたのが、民生委員の橋本で、今自分がしていることは恩返しだと。亜紀は、邦子の言葉に心を動かされ、福祉協力員のメンバーになる。

2月、亜紀と邦子は地域の交流イベントを提案する。白洲梅林へのピクニックだ。車いすの波岡も参加した。白洲梅林は、波岡にとって娘たちとの大切な思い出の場所だった…。



●石田亜紀(40)
夫のUターンに伴い
北九州へ



●石田誠(45)
亜紀の夫



●照井邦子(63)
福祉協力員で
世話好きおばさん



●波岡康弘(68)
一人暮らしの男性



●橋本和夫(66)
民生委員・児童委員



●橋本福恵(65)
橋本の妻
福祉協力員



●瀬口峰子(84)
一人暮らしの女性



●大平慶一(41)
「いのちをつなぐネット
ワーク」担当係長

【探梅】(たんばい)

(早咲きの)梅の花を探して見歩くこと。冬の季語。(広辞苑)